慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十八年四月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二八七号）

目次

祖師聖人の遁世……臼杵祖山……(1)
一道会の記……榊原徳草……(6)
信人の告白……野呂正音……(9)
念仏詩抄……木村無相……(14)
信味断片……花田正夫……(17)

第二十五巻　第四号

祖師聖人の遁世

臼杵祖山

一月十日。

一昨日より祖師聖人の報恩講なり。これにつきて図らずも心上に思い浮かべるは祖師聖人の遁世（とんせい）ということなり。

世の多くの人は聖人の遁世を如何なる思いをもって観察せるやを知らずといえども、我等は我等自身の思いをこれにいたすべきを思う。

各宗の祖師の中において、わが祖師聖人ほどの遁世者はあらざるべし。他にその比類を見出すこと能わざるものあり。何故なれば他の多くの祖師は遁世とは云え、世を遁れて更に世を作り、家を出でてさらに家を成せり。然るに聖人はこれに異なりて世を遁（のが）れてさらに世を作らず、家をでてさらに家を成さざりしなり。

生家を出でて叡山二十年、この間の辛酸艱苦の修行の跡をすてて黒谷に入り、その後北陸流刑につづきて、ほとんど三十年になんなんとする経廻の縁をすてて京都に、京都の約三十年の所々転々と移住したもうていたらくであり、そうして九十年の寿命を保ちたまえり。

この間において定まれる門戸を構えるにあらず、道場を開くにもあらず、その当時すでに生涯存在をみとめられざる観あり。歴史家の研究せるによれば聖人の史蹟の渺漠（びょうばく）として認むべきものなきに苦しむと言わるる人さえあるにいたる。思うに滅後ほとんど七百年に近き星霜を経たる今日（昭和五年）に、その実人の存在如何を疑わるるぐらいにあらずして、すでにその当時において尚且つ実人としての存在をほとんど忘失せられしなり。

思うに聖人は自己の一小個体の存在と否とを念頭に懸けられたる人にあらず。さればこそ霊化して万人億兆の上に面々各々の万億の聖人を信嘗（しんしょう）せしめらるるに至れるにあらずや、これ我等如何に信ぜざらんとしても信ぜざるを得ざる所以なり。

如何に奮闘者なりとも、努力者なりとも、徳行者なりとも、救済者なりとも、若し有限の個体に止まらば、決して万々億々の一一各自の上に霊化すること能わず。しかるに聖人それ自身においては、霊化などいうことは、全くその胸中に蔵（おさ）めたるものにあらず、されば聖人の自覚の上において、今かくの如く所々移住の体たらくにして、世の人に自己の存在を知らしむる能わざるも後世必らずかくならばやと胸中鬱勃（うつぼつ）たるものあり、又は期待するところありて後世にいたりてかくなりたるにあらず、その在世の当時、人の知ると知らざると、世の遇すると遇せざるとにかかわらざるのみならず、聖人自身が、自身という観念なきまでに出家遁世せられたるなれば、何ぞ万一の希望を後世にいだくことあらんや。

然るに如何にしてか、かくも霊化し、偉大なるにいたれるやを思うに、我等は、かくならばやと思わずしてかくなられたるもの、これ即ち平凡なる聖人の徳にして、又如来自然の妙用（めょうゆう）なり。

期待せずして顕われること、あやしむなかれ、この期待せずして顕われるものこそ、真実に堅固不動の心境にしてこれを自然の大用現前（だいゆうげんぜん）といい、或は勝縁勝境、必現前とも名づけらるべし。若し期待して成れるものは皆これ分別意識の風に動乱される波浪にして、その分別意識の風の静止すれば成就顕現の波浪もともに消ゆるなり。されば常住法界、無分別のところにおける現成こそ、真に無限不動の期待なければ、裏切られることもなき大用現前なり。聖人の霊化このこころをもって知らるべし。

さらに他の祖師の遁世出家と、わが聖人の遁世出家をならべてその意楽（いぎょう）を思うに

一、我が聖人は、世に遁れて世を遁れ、家に出でて家を出ず。

二、他の祖師は、世を遁れて世に入り、家を出でて家に住す。

我が聖人は五濁悪世という自己自照の世に遁れこみて、濁乱に同化し、在家止住の身に成りて、愛欲の広海、名利の大山に沈没し迷惑せり。これすなわち寒殺すれば寒なく、熱殺すれば熱なき底の実相なり。寒は寒を自知して、寒自らを凍結することなく、熱は熱を自知して、熱自らを燃焼することなし。

これによりて思う。わが聖人は妻帯何かあらん、煩悩罪悪何かあらん。これありてこそ自己自照の実性の認識を得る。いわゆる、心頭を滅却すれば火もまた涼しなど云うは大悟徹底の真証にあらず「火もまた涼し」とは大なる衒気（げんき）なり、文糟（ぶんそう）なり、何ぞ火の涼しきを待たんや、火は火にして熱なるに足れり。

世にわが聖人を温柔為すことなき堕落僧なりと書き、且つ語るものあれども、我等をもって見れば、その一大堕落こそ聖人の聖人たる尊重なる所以なりとす。

道昭・玄昉の学解、伝教・弘法の聰慧、明恵・解脱の明達、栄西・道元の清高、日蓮の峻厳なるなどに比すれば、わが聖人の無戒名字、聖人の罪悪深重、煩悩熾盛、無慚無愧のこの身、真実の心なく、清浄の心なき、貪瞋邪偽おおく、奸詐（かんさ）ももはし身にみてり、悪性さらにやめがたし、心は蛇蝎（だかつ）のごとき、よしあしの文字をもしらぬ、愚禿、これこそ我等において、かの学解者よりも、聰慧者よりも、明達者よりも、清高者、峻厳者よりもより尊さと親しみとをもって喜びを生ぜしむることの幾層倍ましてすぐれたるかを知らるること能わざるものあるを感ぜしめらるるものあり。

霜上さらに雪を加うるもの、萬仞崖頭（まんじんがいとう）孤危嶮峻の慨、錦上さらに玉を鋪（し）くもの、芙蓉（ふよう）頂上、八面玲瓏（れいろう）の観、仰ぐべきは仰ぐべし、崇むべきは崇むべし。

しかるに、平凡嗤笑（ししょう）すべし、愚禿指弾すべし、肉食妻帯唾棄（だき）すべし、無戒名字破門すべし、無学文盲可憐（かれん）に堪えざるものあり。これ実にわが聖人のすでに自己の個体を一時に脱落（だつらく）して大用を永久に現成するに由らずんばあるべからず。

以上は御正忌にあたりて報恩の念、思慕の情に駆られて聖人の威徳尊容を頌せるものなり。

一月十六日。

南無阿弥陀仏

今日は祖師聖人滅後第六百五十一回の御正当日なり。九十年間、雨に風に、霜に雪に、一生を菅（すげ）の笠によりて僅かに雨露の苦しみをおおい、一身を竹の杖によりて辛うじて老衰の悩みをささえ、自から苦悩に安んじて他の栄達をかえりみず、いたずらに世人の知遇をねがわずしてただ如来の慈恩を仰ぐのみ。

自から安んずるの徳香は自然に内に薫発（くんほつ）し他を怨まざるの温容は法爾（ほうに）に外に流化す。これ全くわが聖人の単に道をひろむるものにあらずして、それ自身が大道の本源なりしに由る。

我等は進一進し、歩一歩して転化すべきは、道に志すといわんより、また道を行い道をひろむるなど云わんより、我が全身これ道、全力これ道たるに体達せざるべからず。これやがて祖師をわが身に現成せしむる所以にして、またこれ自身を更に開発せしめる道理なり。祖聖を仰崇するの要は、自から祖師に相見し、体達するにありとす。

そもそも道に志すといい、道を行うといい、道をひろむるといい、是等みな枝末なり。自から進んで道に同化し、さらに転じて自己本来これ道なりとの覚悟こそ根本なるを体験するにありとす。

おもうに道に志すものは、道ちょうことを遠くに望みそれに進まんとするゆえ途中にて廃弛（はいし）するもの多し、たまたま達せりとするものも真の体達にあらざるゆえ単に時々思い出して楽しむという分斎（ぶんざい）なり。それはまだ怨（じょ）すべしとて謬（あやま）りのはなはだしきにいたりては、われらはすでに道に達せりなど、得たりかしこしの高慢心を振りかざすにいたるは最も戒慎（かいしん）すべき一大事なり。

いわゆる志すという志が多く邪道曲路に踏み迷い易くして、しかして未達に達し、未得に得して、達未達、得未得の辺涯なき一体の道、即ちこころざすと思える自己と、ところざされる道と、能志・所志をふたつながら亡（ほろ）ぼしてこそ真の道味は真嘗（しんしょう）せられるのである。若しここにいたずらして、いわゆる行う人と行わる道と、弘むる人と、弘められる道と懸隔（けんかく）を生ずる時は、人も人たらず、道も道たらず。今の世の我等の多くは、人たらざるの人、道たらざるの道、それをもって行いひろめんとするの最も可憐なるものの集団なり。（中略）

しかして今わが聖人の道をひろむるにあらずして、それ自身が大道であるという一如体を仰崇せざるを得ざるものあり。現今のいわゆる宗教家なるもの、それは昔の智者達とても虚名をきそうならいの多きことは餘りに変りもなきことなるべし。さりながら、今の世は一層そのはなはだしきを覚ゆるを遺憾（いかん）とする。

口を開けば仏心的々の相承、如来廻向の信心、口賢なるは一倍なれども、畢竟（ひっきょう）するに口に糊する方法なり。また人の手前をよそおう虚名の徒たるにすぎず、あわれむべし、あわれむべし。

そもそも相承とは何ぞ、廻向とは何ぞ、また、何れより相承し廻向せられしか。我等自身すでに仏心的々の相承なるにあらずや。また我等自身すでに如来廻向の流露なるにあらずや。何ぞ屋上さらに屋をきずくの的々、相承といい廻向といい、倶にかくの如きの真意を信掌せしむるの善巧のみ、指針のみ、何ぞいたずらに足を善巧にかけ、目を指針にそそぐのみに止まんとするものならんや。畢竟するに自分自身の仏心に安住し、信心に自照すべき大事なるに想到すべきの要なり。

かく申さば、或は云わん、廻向の意義は、願わくばわれを救済したまわれとの心痕（しんこん）に得らるるなるべしと。否、我等すでにすでに廻向にあずかり居たるなり。

無始已来廻向を蒙り居るなり。しかしてそれはすでに我が物たりしなり、それを自覚せざりし我等の無調法なり、今幸にしてそれを自覚せるとき、今をもって昔に従えて信

心廻向の名目を示せるまでなりと知るべし。

昔は三度固辞して受けざりし宗祖の流れを汲むものに、今や紫や緋（ひ）の衣によだれを垂れて世を欺く僧の多くまた昔はその当時においてすら存在をみとめられざりしまでに世を捨て身を捨てたる祖師の血をうくるものに、今は豪奢（ごうしゃ）をきわめ、放逸をほしいままにする如き言語同断、沙汰のかぎりにあらず。悲しむべし〳〵。

水たらざるをもって洗わんとす
火たらざるをもって焼かんとす
衣たらざるをもって着らんとす
食たらざるをもって食わんとす
住たらざるをもって住まんとす

狂にあらずんば、妄と言わん

これらの意義を知らざる人は最もすくなかるべし。されども、道たらざるの人にして道を説き、道に志し、道を行い、道を弘むと豪語するに至りては狂に非ずんば妄と言わんのみ。然るにこれを知り覚醒する者甚だ稀なるべし。

ここに唯だ独り往時にさかのぼりて、道に志せしにあらず、道を行いしにもあらず、道を説きしにあらず、道を弘めしにあらず。而して躬（み）自ら是れ道なる我が聖人の独りさびしき影のうずだかき、如何にうずだかきかを仰ぎ、その広大なるに感泣せざるを得ず。

我れ死せば鴨川の水に流すべしとのたまわれし遺骸は、後世偶像と化して虚礼を集むるの悲哀を感じ

わが歳極りて安養浄土に還帰すというとも、和歌の浦曲（うらわ）の片男波の、寄せかけ〳〵帰らんに同じ。

一人居て喜ばは二人と思うべし
二人居て喜ばは三人と思うべし

その一人は親鸞なり。

われなくも法は尽きまじ和歌の浦
あおくさ人のあらんかぎりは

とのたまわれたという御心は、永遠に、あらんかぎりを尽して、寄せかえるなるべきを、自ら道ならざる我等の狂妄なるは、祖師に対する冒瀆（ぼうどく）であり、反逆であるを切実に感ずるものであり、愧ずべし、畏るべし。

それも単に我等自己一人の狂妄なるに止まらず、ひいてこれを万人に及ぼさんとするにいたる、最も戒慎、恐懼せざるべからざるの大事なり。

南無阿弥陀仏

昭和五年三月号、臼杵祖山師個人雑誌、自照。

一道会の記（一）

榊原徳草

十月二十九日、今年の一道会は先師御往生になってから第三十五回目の一道会である。お生れが明治六年であるから生誕百年に当る。三十五年といい百年といい何かそこには遠い遥かな佗しさが思われてくる。先師と私共を歳月が遠くへだてて悲しみにも近い寂莫の感さえ催おしてくる。そうした感慨の中を通じて、それとは質を異にした別の生々躍動、いよいよ光りを増し炎（ほのお）を拡大してやまないのは、先師の「ただ念仏してのたのもしさ」のおいのちである。

当日、開会のすこし前に私の息子が玄関で履物を数えたら八十三足あったという、その外新築の勝手口の玄関から来られた毎月例会の人々や其の他の人々を合わせると約百人は越えたことになり、十五畳の間、奥の十二畳、次の間の七畳、それに廊下や客殿の書院はそれこそ立錐の余地もない有様で、まことに盛大な今年の一道会であった。

先師の御長男の寿夫様は、俄かの風邪で欠席の電話があったが、花田先生が遠路参会下さったのは嬉しいことであった。又岡山からは歎異抄のフランス語訳をしてジュネーブで出版された山田宰教授、又仏光寺の宗務総長の千葉葆亮師、その他私の存じ上げない人々ばかりと云ってもよい位の人々が堂に満ちた。この数年来参会して下さる長崎市の聞思会の人々、遠路からお苦労を思うと、『各々十余ケ国の境を越えて……』の歎異抄の言葉が浮かぶ。その中には去年の会に来られて今年のホテルの予約までして帰られた岸川さんのように社員の事故死のため俄かに中止のやむないことになった方もあられる。まことに御縁というものは頂くものであって自分のはからいで出来るものではないことを知らされ、只々遠く宿縁を謝す外はない。

さらに、上田義文博士と西元宗助先生御夫妻は和光寮のハワイや北米の二世の留学生の方々を伴っての参会。四国からは松本解雄先生、千葉崇憲先生、その外葛西、高塩両姉その他の人々。向島諦宣先生も御都合をつけて参会して下さるし、川畑愛義先生や井上善右ヱ門先生もお顔を見せ

て下さった。

宮地廓慧先生は貝塚の金児默存師のお寺の例会で不参の御返事、又四国の田島法仁様辻昭一様などからは御霊前の御供料を送って下さり、又長崎の高原夫人は先師のお好きなバラの花を遠く長崎から御持参下さった。

定刻の一時に仏前に阿弥陀経を誦し、先師の御影に向って歎異抄十章までを例年のように拝誦する。毎年のことながら「幸に有縁の知識に依らずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや」の所を拝読する時に涙がこみあげて声がつまってしまう私である。誠に幸に有縁の知識をお与え下さったればこそ御念仏の慈光に浴することが出来たのである、好きな人にどうしてめぐり遭えたのか、全く私の手の届く所ではない。先師が「犬も歩けば棒に当る」の語を引いてこの間の消息をお話し下さったことを思い出す。全く私からではない、あちらからである。まことに有縁の知識に依らなかったなら、との歎異抄の序文は私にはいつも新らしいひびきをもって胸を打つのである。

会を開くに当って私は先生の思い出を少し話した。

池山先生は、いつかのお話の時、先生の少年時代に、百万遍の念仏講とでもいうのがあって、そこへ先生も行かれて、大きなお珠数の輪をお座敷の中に置いて、その珠玉を順々にくりながらナンマンダブ〳〵と大声をはり挙げて念仏したことがある。御念仏が済むとお菓子が貰えるので、それが目当だったんだが、今思うと、もうすでにその時、ただ念仏させられておったのだ、と仰言った。

もう一つは、これは或る年の春の岡崎市の親鸞会で、会場は岡崎城跡に建つ巽閣であったが、春雨が煙っているその時の講話の開口一番、

〃雨は降る降る岡崎の城に、花を催おす雨が降る〃

と、その時の情感に副いながら、お念仏の花がこの岡崎の地に催おし開かれるようにと先生の願いをも歌われたように感じられた。この〃雨は降る〳〵〃は城ケ島の歌から連想されたものである。この歌の中に

〃船は艪でやる、艪は歌でやる、歌は船頭さんの心意気〃

という一節があるが、これを先生は詠み替えて

訂正

船は本願、船頭は廻向、歌は念仏、艪は廻向

と、すっかりお念仏に味わい直して喜ばれたこと、そんなことを御披露しました。

最初に白井先生がお話し下さった。

今日は池山先生の御生誕百年の記念の一道会であります

が、私は直接先生に御目にかかったことはないのですが、皆様の中には先生の御教を受けられた方々が沢山居られるのでしょうから、そのお話をお聞きしたく思います。

ただ私は不思議な御縁で、池山先生と無二の親友の近角常観先生に永い間ご縁を頂きましたので、そのご縁で今日の席にお参りさせて頂いたのですが、只今榊原様から何か感想をとのことですのですこし申し上げます。

近頃の感想と云いますと、この間、高松へ参りまして、一子地（いっしじ）ということを述べて参りました。今日も先生の名号碑にお参りしてあの「一心正念直来」を釈して「オネガヒダカラ　スグキテオクレヨ」と、そのお心持にいつも感激を覚えるのであります。それは人間の生き方として、我々いかに生きるべきかという主題を持って居りますが、それにこたえる答えが、自分の身においては、心の動きを浄らかにするということ、人と人との交りにおいて、思いやりの心をもってすること、これが、人は如何に生くべきかという問題に対する最後の答であると思います。意（こころばせ）を浄らかにするということも、又、人を思いやって生きることも、自分の身に反省して見ますと、どちらも砕けてしまって、できそうもないことであります。

その砕けてしまって、できそうもないこの身を思いやって、いだき抱えて下さる、そういう方がおいでになる、それが南無阿弥陀仏となって顕われて下さっておいでになる、如来の大悲がある、その悲願から成り立っている。こういう自分としては己れを律する道において、人を待つ身において、どうしても砕けて終う外ない身の上を憐れみ下さる親様がいられる。その親様にお会い申すということは、人間に生れた本当の意義があるということを、段々知らせて頂いて居ります。

それがもう八十を越えてしまって、何時どうなるか分らない私として殊に有難く思うのであります。これがこの頃の感想と云いましょうか、まあお互いに人間の世の中に生れて、南無阿弥陀仏のお呼声に行き会うことが出来たということ、何よりもありがたいこと、嬉しいことであるということを、こういう会におあいするにつけても思うのであります。

池山先生のご縁の方々が多いと思いますが、本当に人間に生れあわせて、南無阿弥陀仏という大悲のお呼声を伝えて下さいましたよき人にお遭いすることができたことは、この上無いしあわせであるということをしみじみ思うことであります。

（続く）

信人の告白

野呂正音

はじめに

福田正治先生のお宅を（四十四年）二月二十五日の早朝おたずねした。寒さのきびしい日であった。この日は先生の御命日である。霊前にぬかずいて云いようのない感慨におちいった。在りし日のお写真、かたわらに置かれた白い骨袋、読経の声もキレギレであった……。

過ぐる日、私が境内に経塚を建立する動機を与えて下さったのも福田先生であった。先生が拘置所にいた死刑囚、I君に写経をすすめ、心の落着きをみて他力本願を伝え、やがてI君も念仏者となった。

I君は小学校しか出ていないのに、親鸞聖人の御著書を沢山筆写し、よろこびを和歌にのべるまでになった。いよいよ刑の執行も近いある日、彼が書いているものを始末しようと家に持ち帰った先生は、奥さまと共にこれを読んでいるうちに、その心の清らかさにうたれて、「彼は殺すべきでない……」と感慨をもらされたそうである。

私はこのことを承って、これは只事ではないと思った。宿業の恐しさをしみじみ味わった。

先生の記帳に「まんじゅうを二つに割って片方づつ食べて別れを惜しんだ。I君は〃先生、私もあの仏さまのようになるのですね〃と合掌し、〃皆さんによろしゅう、さようなら〃と云いのこして、静かに廻れ右して刑の執行所へ歩いていった。後ろ姿を涙で拝んだ……」と書いてあった。

その日の午後、上沢拘置所長夫妻が名古屋東別院に参詣され、教務所へ立寄って、I君に法名、可説と下賜せられた御礼をいわれて、更に、

「私は人間の一番苦悩のドン底にいる人を救いとって下さる真宗の教法の尊さを実際に知らされました。彼がためにも、又法の立場からも、深くお礼を申し上げます」と、ふかぶかと頭を下げられたそうである。

さて福田先生ご逝去後間もなく、先生の御机下からI君

の日記を発見、借覧してその胸うつ一語々々は、どうしても皆様にお聞き頂きたいと思いまして、老眼の涙を拭いつつ誌しました。見出しはすべて私がつけました。

その一

み親の涙——

仏恩は地獄の底から湧きて
地獄の此処に、彼処に、南無阿弥陀仏
一声、一声、み親の涙

親の呼声

——アアさびしくてたまらん。だが、私はここから出られない。出たくない時と、出たくてたまらん時とあって、さびしい時は、とても出たいです。

アア出ていきたい、アア出ていきたい、一日も早く。

しかし出ていけない。

出ていけないのをよろこぶ心が、どこかにあるようです。

至心信楽欲生我国、南無阿弥陀仏。

眞夜中に

夢うつつ、ソッと起き室外に出ようと二歩三歩
ヒヤッと肌にしみとおるつめたい鉄のとびら

ここは家ではなかったとつぶやく
冷めたいフランネルに座してあたりを見れば、壁と壁
白く冷めたく何か云っている……

如是我聞

如是我聞、私のすきなこの四文字。

私の人生、更生の要を聞かせてくださるのがこの四文字

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と。

私の人生道はここでした。

火の用心

まかせた、たのみましたと安心しておりながら、

月日がたつにつれてまかせたことを忘れ、いつの間にやらはからいのこころが起き出す。

まかせた、まかせたと自らはからって安心してねているのを、その上またはからってユヅイて起こしてしまう。

まかせる心にまかせぬが肝要である。

また、

はからいの心にはからわぬのも肝要である。

本願にも馴れて、放逸に走るようでもいけない。

火の用心！火の用心！

母を呼ぶ

今、何時ごろだろうか。

一声、ただ一声だった。「お母ァさん」と呼んだ人があった。何という尊い叫びだろう！

私は床から出て考えさせられた。

お母ァさんと叫ばずにいられなかったアノ人の心の中はどうであったであろう。文字にあらわせない思いがする。仏名を聞いたような思いがした。南無阿弥陀仏。

ほほえみ

時にまた、苦は楽しからずや。楽しみまた苦しからずや。人間なら一人居てほほえみのある生活が願わしい。

たしなみは人生生活の糧である。たしなみと信仰とは切り離せない。

如来のほほえみは光顔巍々（こうげんぎぎ）として極まりない。私の顔の皮はいうことをきかぬ。ほほえみは人間味であり、人の心までやわらぐ。

知恩報徳

私は歎異抄によって浄土易行の一門に廻入（えにゅう）させられた。

第十八願のおいわれをおきかせいただき、真宗信心の廻向、本願念仏のいわれを感味、感佩せしめられたのは教行信抄によるものであった。

聞法のよろこびをとおして仏に値遇できた。いや、仏のやるせない案じ心のおかげでめざめさせていただいた。真に無限の信をよろこばせていただく法悦の心証である。

ただ念仏して

ただ念仏しての御教誡、御指南は、私一人のためであった。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに可説（I君の法名）一人のためでありました。本願成就のご辛労は私のためでした、ありがたいことです。

世にありがたいことは多くとも、如来さまの願力廻向の南無阿弥陀仏のみ声ほどありがたいものはありません。

不思議、ふしぎは多いが、私が浄土に往生でき仏になれるという、この不思議以上の不思議はなかろうと思う。

摂取不捨

「汝、一心正念にして直ちに来れ、我よく汝を護らん」と呼んでくださる。

私はこの機が頑固でなかなか聞いてはくれません。この手も口も耳も心も、何一つ自由に私のいう事をきいてはくれません。

合掌しよう、念仏いただこうとしても、口はますます固くとじ、耳はかんかん鳴り、手は下へ下へとのびて上にすこしもあがりません。

不思議なことに、人の前に出ると、念仏も出ます、手も自由にあがります。これは、かざり心や、見栄の心のせいであります。

ほんに困り果てたものです。南無阿弥陀仏。光明遍ねく十方世界を照らして、念仏の衆生を摂取して捨てたまわず

その二

人間の根性

人間の根性から抜けきるということは全くむずかしいことです。ですから何といっても、念仏をよろこぶ人、念仏を申さんと思い立つ心のおこることをたしなむ人になることです。

念仏とは南無阿弥陀仏の六字です。この六字には一切の法、一切の功徳の宝が具足せられているといわれます。

私たちは救われたいと思うことはよいことですが、救いを求める前に、救いを求めるには余りに恥かしい私であることを聞くことが大切ではないでしょうか。このような無自覚な人は、利益追求より外ありません……。

おいらは仏の子
親でなし、子でなし、おいらは仏の子
妻も、子も、ともにお同行

幸せのありか

もらったまま、与えられたままが幸せです。幸せはどこにもあります。人の住むところがどこにもあるように、人は誰でも幸せを知ることが出来ます。それは、私の中にある幸せを掘り出すことです。幸せは私の中にあります。

無縁の大悲

現在、今、この三畳の中に坐っているように、南無阿弥陀仏のみ声を聞くことは、将来の座処を約束されたことであると感ずるのです。これはたしかなことです……。

私たちは衆生縁の慈悲をこえて、無縁の大慈悲の坐処に往き、生かさるべきではなかろうか。

眞実信心

ただよろこぶのでない。よろこべぬ身を知らされ、よろこぶべき大悲廻向の尊いいわれをよろこべぬ、このみにくい私を知らされ、大悲廻向の親心に心をかけるのである、身をかけるのである。

身をかけ心をかけて念仏を聞き、念仏を申さんと思いたつ、これは如来の極速円満のさいそくにたしなまれるところ、南無阿弥陀仏。

枯木に花

ありがたや　不断煩悩得涅槃
枯れ草の身には発芽の種子をもち

落書帳の終りに

この月か、この秋かやと今日までも
刑台に立つ身も軽く　念仏にのり

刑台に立って念仏いつのこと
今の念仏こころして味わう

まよい世に、まよい世に、法をききて
弥陀仏と　明日をいただく　まことの世に往く

（筆者住所・愛知県海部郡立田村三和）

徒然草　（四十九段）

老い来りて始めて道を行ぜんと待つことなかれ。ふるき古墳、おおくはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて忽ちにこの世をさらんとする時にこそ、はじめて、過ぎぬるかたのあやまれる事はしらるなれ。

あやまりというは、他の事にあらず、速にすべき事をゆるくし、ゆるくすべきことをいそぎてすぎにしことのくやしきなり。その時悔ゆともかいあらんや。

（百六十四段）

世の人あいあう時、しばらくも、黙止すること事なし。必ず言葉あり。そのことを聞くに、おおくは無益（むやく）の談なり。世間の浮説、人の是非、自他のために失おおく得すくなし。これをかたる時、たがいの心に無益のことなりということを知らず。

（百六十六段）

人間のいとなみあえるわざを見るに、春の日に雪仏を作りて、そのために金銀珠玉のかざりをいとなみ、堂を建てんとするに似たり、そのかまえを待ちて、よく安置してんや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること雪のごとくなるうちに、いとなみまつ事甚だ多し。

念仏詩抄

木村無相

みなご恩

十九の願も　ミダの直説
ご恩なり　聞くばかり
二十の願も　これより早い
ご恩なり　道はない
十八願も　〃愚鈍往き易き
ご恩なり　捷径（せうけい）なり〃
四十八願　ミダノ直説
みなご恩　ナムアミダ仏

ご恩の結晶　ミダの直説
ナムアミダ仏　ナムアミダ仏
ナムアミダ仏　ナムアミダ仏

ミダの直説（じきせつ）　**見せて下さる**

ミダの直説　ナンマンダ仏
〃口から現わるる　ナンマンダ仏

ナンマンダ仏さまは
汝の助かる法は
これであるぞと
見せて下さるのぢゃ〃
光触寺さまの
おん仰せ
光触寺さまの
おん仰せ

一文不通

一文不通の
身にあれば
ただ念仏の
ほかはなし
ただ念仏の
ほかはなし

歎異抄に唯円房
〃一文不通にして
経釈のゆくちも
知らざらんひとの
称えやすからんための
名号におわします〃

一文不通の
身にあれば
ナムアミダ仏
ナムアミダ
ナムアミダ仏
ナムアミダ

となえつつ

聞くこと
聞くこと
お念仏しつつ
聞くこと

聞くこと
聞くこと
お念仏の仰せ
聞くこと

〃弥陀の名号となえつつ
信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして
仏恩報ずるおもいあり〃

先師の恩徳

——松原致遠先生——

先師のおかげで
香樹院講師を知り
先師のおかげで
禿顕誠和上を知る
ああ
わが師
松原致遠先生——

香樹院講師
お念仏の人
禿顕誠和上
お念仏の人
松原致遠先生
お念仏の人

三師を貫くもの
ああ
ただ念仏
先師の恩徳
ああ

ただ念仏——

今のねんぶつ

今のねんぶつ
報恩講
今のねんぶつ
お彼岸会
今のねんぶつ
御法事と
しらせてくれた
ナムアミダ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

角（つの）

香樹院師の仰せに
〃生きながら
角の生えぬも
不思議なり〃
あたまに
そって
手をあててみる

（四七・九・九日）

信味断片

花田正夫

一、愚禿のこころ

ソクラテスは「われは何事も知らざることを知れり」と表白して、所謂もの識り学者のソフィスト学派の人々にきびしく警告している。アテネの当時の青年が彼と語り合うちに自分の無知に気づくと「愚者同志真実なものを共々に求めよう」と手を執って学びの道にいそしんでいる。

孔子は「知らざるを知らずとなす、これ真に知れるなり」と誡めて、自分の智力の限界を知って、誤魔化さず、白紙にかえって道を求めて行くとき、真実への扉がひらかれると云っている。

聖書には「こころの貧しきものは幸なり」とあって、一切に対して謙虚に、心やわらかに接する時、神の国も感得出来るとのことであろう。

こうした聖賢の道は「内は賢にして外は愚なり」と、みのるほど頭のさがる稲穂かなのたぐいで、ことごとくすぐれて立派な教である。ところがからっぽの稲の穂はみのりの秋になっても頭がさがらない、私のような底ぬけの愚者には、その道は高根の月で手がとどかない。その教について行けない無為徒食の生ける屍同様の身を悲しむばかりであった。この絶望の渕にたたずむ私に、八十三歳の親鸞聖人の御書、愚禿鈔の上下二巻の巻頭にくりかえして

賢者の信を聞いて、愚禿の心をあらわす
賢者の信は、内は賢にして外は愚なり
愚禿の心は内は愚にして外は賢なり

とあるのに刮目させられた。聖人が私の愚かさを言いあてられている、しかも御自身のこととして特筆されていることは、何というありがたいことであろうか。

さらに、聖人の八十八歳筆の自然法爾章（じねんほうにしょう）の結の和讃に

よしあしの文字をもしらぬ人はみな
まことのこころなりけるを
善悪の二字知りがおは

おおそらごとのかたちなり
是非しらず、邪正もわかぬこの身にて
小慈小悲もなけれども
名利に人師このむなり

とある。よしあしの文字をもしらぬ人はみな、まことの心なりけるを、とは、内は賢にして外は愚なり、の賢者のことであり、あとは、外に賢をあらわして内が愚かなもの、狂人に病識がないように、底抜けの愚者はもの知りがおしか出来ないと、愚者の底をついての表白である。もとより寡聞の私ではあるが、こうした聖人の信証は、誰からも何処からも見聞したことのないもので、この仰せを聞くといなむことの出来ない真実として、聖人様私もその通りでありますと、聖人の慈懐にひき入れられてしまうて、反抗の仕様がないものである。

二　無慚無愧

前述の「外は賢にして内は愚なり」に驚くと共に、更に聖人八十六歳の愚禿悲歎述懐に、

無慚無愧のこの身にてまことの心はなけれども
弥陀の廻向の御名なれば功徳は十方にみちたまう
蛇蝎奸詐のこころにて自力修善はかなうまじ
如来の廻向をたのまでは無慚無愧にてはてぞせん

とあるのに驚かされる。

さて慚愧について、涅槃経の阿闍世王の帰仏するところに詳しく述べられている。

「二つの白法あり、よく衆生を救う。一には慚、二には愧なり。慚は自ら罪を作らず、愧は他を教えて作さしめず。慚は内に自ら羞恥（しゅうち）す、愧は発露して人に向う。慚は人に恥じ、愧は天に羞ず。……慚愧なき者は名けて人と為（な）さず、名けて畜生と為す。慚愧あるが故に、則ち能く父母・師長を恭敬す。慚愧あるが故に、父母・兄弟・姉妹あるを説く」

われよし、われかしこしの独善独断の邪見と憍慢にある間は、父母も師長も兄弟も無視して、お山の大将われ一人の生活で、その人達を冬は喜び、夏は邪魔にする火鉢同様の扱いしか出来ない、これでは畜生で人間とは云えない、との厳しい誡めである。

ところが観無量寿経の中で、上輩、中輩の善凡夫の救済を説かれた次に、凡夫が悪縁に催されて衆罪を作っている下輩の悪凡夫が本願念仏に救われる姿をとかれているところに「このごとき愚人は僧祇物を盗み、不浄説法をしながら慚愧あることなし」と破戒僧をあげ、また十悪の衆生を「このごとき愚人は衆悪を多く造りながら慚愧あることなし」と説かれて、その者が本願の念仏一っで救われると悪人救済の至極が述べられている。源信僧都も法然上人もこ

こを大切に読まれて「この品もっとも要なり、すこぶる我等が分に相当せり」と頂いていられる。わが親鸞聖人はこの無慚無愧の下輩の愚人に御自身を見出されて、たすかるべからざる者のすくいが、如来の御廻向の大悲心一つで成就せられることを渇仰していられるのである。

あらゆる宗教は、懺悔、慚愧は大切な欠くことの出事ぬものとして説かれている。穢れたものははらい浄めが必要であり、罪人は悔い改めねばならぬ。しかしそのことを実践して行く時、ついには無慚無愧の身という壁につきあたる。

私が学生時代に読んだ話であるが、マグナダラのマリヤが罪を犯し、村人から石で打たれて責めさいなまされている時、通りかかられたキリストに救いを求めた。イエスはマリヤの囲りに線をひいて民衆を外に出さしめ、形を改めて「汝等のうちに心にやましきことなくしてこの女を打ち得る者は打て！」と告げる。人々はこの俊厳な言葉によって自分の内心を省みさせられ、打つ資格のない身に気づき石をすてゝうなだれて次々と去って行った。そこでマリヤに「汝の罪は許されたり、再び犯すことなかれ！」とイエスは誡められている。さて、再び犯すな、との一言は私にはハイと答えようのない身、これがあれば救いからもれてしまうのであった。形の上ではどうあろうとも、そういうことが誓えるかどうか？私には行き詰ってしまうのである。悔いることは出来ても改めることの出来ない私である。罪を悲しみながら、罪の潮から出ることの出来ぬ人魚の歎きの繰返しで、文字通り無慚無愧の頭のあげようのない身である。ここに、聖人の悲歎述懐は、慚愧の至極として身にしみ、その者への救いの御手、弥陀廻向の御名が唯一無二の救いの船となって下さるのである。

生死の苦海ほとりなし、久しく沈める我等をば
弥陀弘誓の船のみぞ、乗せて必ずわたしける。

四　自然法爾

トルストイの言葉に「太陽を探すのにロウソクも電灯もいらぬ。太陽は太陽の放つ光で自らをあらわにする。ロウソクや電灯で探し出した太陽は光も熱もない偽造物である」とあるがわれわれの智慧とか経験とかで探し廻っても絶対真実なるものが見出せるものではない。

清沢満之師の「わが信念」の中に、

「私の信念には、私が一切のことについて、私の自力の無効なることを信ずるという点があります。この自力の無効なることを信ずるには、私の智慧や思案の有りだけを尽くして、その頭の挙げようのないようになるということが必要である。それが甚だ骨の折れた仕事であった」とある。

聖人が、無愧無慚とも、内愚外賢とも仰言るのは「煩悩具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなるることあるべからざる……」「いずれの行もおよび難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし」の自力無効の告白である。そこには唯々仏の願力自然のはたらき、たすかるよすがのない者をよすがとして願をおこし行をかさねて、浄土へ迎え成仏せしめずばやまじと常時不断にそそぎかけて下さる大悲大願の御ちかい一つが力であり、たのみである。歎異抄に「さればよきこともあしきことも業報にさしまかせてひとえに本願をたのみまいらすればこそ他力にては候え」とも「すべてよろずのことにつけて往生には賢き思いを具せずしてただほれぼれと弥陀の御恩の深重なること常におもい出しまいらすべし。しかれば念仏も申され候、これ自然なり、わがはからわざるを自然と申すなり、これすなわち他力にてまします」と、願力自然を讃仰していられる。

おもうに聖人の九十年の御生涯は、弥陀仏の本願力一つを経により釈によって明らかにして下され、そこに凡夫往生の直道を御自身に体解されて、われらをも導き入れて下さったのである。真実の宗教の真面目は、われらの持つ煩悩心からおこす願いを神仏によってかなえて下さいとたのむことではない、清浄真実の仏の本願が不思議にもわれわれの煩悩の泥田の中に成就して下さるのである。仏願の成就であるから成仏の果が必然に結ばれるのである。善導和讃に、

信は願より生ずれば念仏成仏自然なり
自然はすなわち報土なり、証大涅槃うたがわず

とある。聖人の八十八歳の三帖和讃の結びには、自然法爾章をあらわされて、願力のもとよりしからしめて下さること、行者のはからいにあらず、われらとしては如来の御ちかいによって現生に信心をいただき、来生に成仏させて下さるので義なきを義とし、如来の御はからいにはからわれてまいるばかりであるとおのべになっている。

おもうに善導大師によって明示して下さった機・法二種の深信、（じんしん）自力の微塵も役立たぬことと、その者を正しく往生成仏せしめて下さる願力の深信こそ信のかなめである。ここに近角常観先生の御尊父、常随法師の御臨末に、常観先生が「おたすけ下さることがありがたいことですな」と枕頭で語りかけられると、御尊父がすかさず「このたすかるところのないものをなあ！」とおこたえになったとある。私共は聖人に導かれて、この信の至極を教えられるのである。

五　一味の信海

中村元氏の釈尊伝に次のようなことを記してある。

仏陀が最後の雨期を竹林村ですごされた時、阿難は、最後のお説法を懇請した。その時、

「阿難よ、僧達はわたくしに何を待望するのであるか。

わたくしは内外の区別なく法を説いた、何も隠していない、わたくしは修行僧の仲間を導くであろうとか、修行僧の仲間はわれに頼っているとか思うことがない。

わたしはもう老い朽ち、齢を重ねて老衰し、人生の旅路を通り過ぎ老いて八十となった……。

阿難よ、この世で自らをよりどころとし、法をよりどころとして他のものをよりどころとせずにあれ」

と語られたとある。

ここに、私は、親鸞は弟子一人も持たず、如来の教法われも信じ人にも教えきかしむるのみ云々の聖人、また、我なくも法はつきまじ、と仰言った聖人が髣髴（ほうふつ）として心に浮かぶ。

更に、自帰依、法帰依と遺訓せられたところに心をとめるとき、この「自」とはもとより、仮和合（けわごう）の自己を、われであると思いそれに執着していることではあるまい。これは仏陀の御目に徹見されたわれらの姿である。そこに、一切衆生、悉有仏性と、御照覧下さると同時に、煩悩に覆われて、仏性を悟顕することのむつかしさもよく知り抜かれてのお言葉であろう。

法然上人が聖覚法印に語られた中に「一切の仏教を学んだが、皆仏性悟顕の一つが大切である。それなのに自分は十五の時から四十三の日まで、その道一つを願って修学修行をしたが、すっかり駄目であった」と歎かれている。そして、善導大師の導きによって選択本願の念仏一つが仏願に順ずると気づかれ「余が如き下機の行法は、阿弥陀仏法蔵因位の昔かねて定めおかるるをや」と随喜していられる。この時、自分の駄目さを歎いていられる法然上人に、「自身は現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と仰言る善導大師の教えは上人の心をひきつけると共にそこに働く本願成就の念仏が上人の心の闇を破ったのである。

善導大師の胸に輝やく法の光が、出離無縁の法然上人の実機を照し、前聖後賢その規を一つにされて同一念仏の道をたどられたのであるが、そのまんま、法帰依、自帰依の釈尊の遺訓がうかがわれる。

以上のことを京都の榊原さんに報告すると、折りかえしのお返事に、仏遺教経の終りに、釈尊は、

「汝等比丘、常にまさに一心に出道を勤求すべし。一切世間の動不動の法は、みなこれ敗壊不安の相なり。汝等しばらく復た語ることを得ることなかれ、時まさに過ぎなんと欲す。我滅度せんとおもう、これ我が最後の教誨する所なり」

と説かれているが、このまんま

「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことのみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、唯念仏のみぞまことにておわします」

との聖人の仰せと規を一つにされていると思われる。但し、出道とは通仏法では四聖諦であると云っているが……との通信をうけた。ここに、歎異抄の二章「弥陀の本願まことにおわしませば釈尊の説教虚言なるべからず、釈尊の説教まことなれば善導の御釈虚言なるべからず、善導の御釈まことなれば法然の仰せそらごとならんや、法然の仰せまことならば親鸞が申すむねまたもってむなしかるべからず候か」とスラスラと何気なく仰言っている中に本願力に貫かれた師弟一味、四海通ずるに皆兄弟なりのむつびが拝されるのである。

今年は聖人御生誕八百年、そして立教開宗七百五十年にあたり、東西両本願寺はもとより真宗各派は夫々に聖人を慕い、聖人讃仰の催しがすでに種々と執行せられている。この一文を草しながら、聖人から蒙る大恩を仰いで私は私ながらに報恩に擬する次第である。

（四十八年三月彼岸の中日）

ともしび

源信僧都は常に「名利」の二字を掲げて拝み給う

（源信僧都伝）

日本の浄土教の祖師、源信僧都は叡山の奥深い横川に隠棲せられて、一筋に念仏往生の白道をあかして下さった。

その僧都は、いつも「名利」の二字を居室に掲げて拝まれた。それには、十五の若さで召されて経典を講じ朝廷から賞として布帛をいただかれたので、喜びのあまり母君にそれを送られた時、子が世にみとめられることは嬉しいけれど、名利に酔って世渡り僧となるな、ときびしく誡められたことによる。しかしその後仏道の真意、念仏往生に心が定まったにつけても、はじめは名利の心から仏道を学んだが、それが御縁になって仏の真心にあうことが出来たの

聚墨生

は煩悩の身、名利の徒をことに憐んで下さる大悲大願の善巧によると喜ばれたと思う。嘘から出たまことである。

煩悩具足の愚鈍な私共は、はじめから純粋な心で道は求められない、身に持つ欲望のままに仏法を学ぶばかりであるが、それをしりぞけ給わず、広大無辺な仏陀のまことにおさめられ、転悪成善せしめられて真実心に転化せしめられるばかりである。

（四十七年、十二月十日）

生死の中に仏ましませば生死なし

（法華経）

旅は道連れ世はなさけというが、よき友を恵まれる時、荒涼とした人生もひときわ花やいでくる。友にも竹馬の友、同郷の友、趣味の友といろいろあるが、それらはみな、遠ざかればうとんじ、離れると忘れるという鉄則に支配せられる。人と人との心が一つにとろけて常恒の友情を保つことは、まことに至難である、否、限りある身としては不可能である。たとえ長く続いた友情も無常の嵐の前にはあえなく消えてしまう。

こうした人生にあって、その一切を知り尽くされて、常に大悲の御手をさしのべて下さるみ仏ましませば、生死はてしない世にありながら、不動の立脚地を恵まれるのである。これ一つあって物や人から独立して生きて行ける。

「仏は最大の良友である」と恩師は喜ばれているが、聖徳太子は「仏は不請之友なり」と世間の請（もと）めてはじめて与えられる友とわけて随喜していられる。法華経の「生死の中に仏ましませば生死なし」とは、仏心に開眼せられた人の讃仰の声である。

（四十八年一月二十八）

蛇蝎奸詐の心にて自力修善はかなうまじ
如来の廻向をたのまでは無慚無愧にてはてぞせん

（愚禿悲歎述懐）

草も木も大地に支えられて成長するように、私の生のよるべを歴史をこえて輝く聖賢の教えに求めた。しかしそこに照らし出された私は、小人であり、利己心のかたまりであり、空っぽで頭のさがらぬ愚かさであった。聖賢の道はいずれも立派であるが、どうしてもついて行けない身を悲歎するばかりであった。

その時、歎異抄を恵まれて親鸞聖人の教えを聞いてびっくりした。どの教えにもついて行けぬ私に、どこどこまでもついて来て下さる阿弥陀仏の本願のましますことを知らされたことであった。ここに私のような俗物、ころがっている石コロ同様の身も、安心して大手を振ってたどれる道

を教えられた。しかも聖人は何時でも何処でも私共に同座して下さって

「親鸞も同じだよ。ただ御一緒して下るお方におたすけいただくばかりだよ」

とかしずいて下さるのである。

（四十八年三月十一日）

天下の草木、一つとして薬にあらざるものなし

（四分律）

仏弟子で名医のほまれ高いギバ大臣は、医道を学んで七年、一切の草木に薬にならぬものはないと知った時、師匠から医道の皆伝を許された。俳聖芭蕉は垣根に咲くなずなに、古池にとびこむ蛙の音にそれぞれの妙趣を見出して「見るもの花にあらずということなし」と感歎している。

仏の心光照護の下に信の旅行く念仏者の信眼には、自身の内外に起るあらゆる事象の上に、仏の徳光が仰がれる。親鸞聖人は恩師法然上人の上に仏智を拝し、聖徳太子の上に慈光を仰がれているばかりでなく、大逆のアジャセ、愚痴の韋提希、仏敵の提婆をも権化の仁と随喜されている。

私共は身にもつ業は逃れる術もないが、念仏を申し〳〵業道に随順する時、道は自然にひらけて浄土の返照をうけて無限の安慰を恵まれるのである。

親の呼び声

牧場がライオンに襲われて、羊が次々と殺されるので、牧場主達は狩人をたのんでライオン退治に山に入った。

そこには親のライオンは何処かに出かけていて、子供のライオンが一匹洞窟にいた。牧人たちはそれを連れて帰り羊の乳で育てていると、番犬が、吠えると羊と共に逃げ、人が口笛で呼ぶと羊と共にしっ尾を振ってなついてきた。段々と身体は大きくなっても、羊のようなおとなしいライオンとなった。

ある皎々と月の照る夜半である。子を求めてやまぬ親のライオンが、四方の山々にこだまする声で山上から号咆（ごうほう）した。一声、二声、三声、四声と！

羊達はもとよりのこと、番犬も、牧人達も震えおののいて身をかくした。

しかし、今までは、犬に、吠えられて逃げ廻ったライオンの子は、猛然と立ちあがって、その声のする山上に走り去っていった。

そして母と子のライオンは、共に月にうそぶいて吼えた。それ以来、口笛にもなびかず、犬の声をも意を介さないライオンの本性にかえった。

（イソップ物語より）

あとがき

桜花咲きにおう四月となりました。誕生仏を中心にして歌をうたい、花を捧げて、仏陀の降誕をことほぐ行事がいたるところに行われることでしょう。ことに本年はそれに加えて、親鸞聖人の生誕八百年と立教開宗七百五十年の記念行事が真宗各派に行われて京都を中心に念仏の声が高くあがることでしょう。

朝日新聞の夕刊に「仏事に縁の薄い当今、歎異抄が再び読まれてるという」と素粒子が不思議そうに書いているが、子が親を捨てた姥捨の話どころか、親が子を殺す事件がアチコチに見られ、公害は日本全体を覆うて、魚も小鳥も小虫も段々影を消しはじめた今日、五濁、悪時、悪世界という仏語通りの渦中に住む身として、真実のよるべを求めずにいられないのは当然のことである。あらゆる煩悩を身に具した身が、あらゆる悪縁にふれて織りなす有様を指摘される仏陀の御目には、無限の涙があふれ、大悲の御手をさしのべていられるのである

縦令一生造悪の衆生引接のためにとて
称我名字と願じつつ若不生者と誓いたり

○

臼杵祖山師は、近畿、中国、九州、四国の篤信の方々から非常に慕われた方で、祖聖と同じ信の旅をせられた人であった。祖師聖人の記念の春に、祖山師の御目にうつる聖人の御姿をお読み下さい。

野呂さんの「信人の告白」は死刑囚の念仏に帰しての告白であり、私も同君に二度面会いたしました。慈光誌百号に処刑後に手紙などを本紙に記して、同君の導きを頂いた、当時の読者の方は御存じであろう。

次に一道会の記を、浄住寺の榊原さんから頂き、例年のことながらその御苦労を深謝申している。先日のおたよりでは、名号碑に梅花が香っているが、やがて桜花に飾られるでしょう、とのこと、それが紅葉する秋、本年の一道会が賑あることであろう。

四月のうちに木村無相さんの詩抄が出版せられる由、お知らせをうけた。

念仏詩抄　定価　六百円　送料　八十円

京都市下京区花屋町通西洞院西入
永田文昌堂　振替　京都九三六番

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午后一時半
一道会例会。
市電、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、左入ル二軒目。南区駈上町二丁目。

○毎月二十四日、午前、午後。昭和区小桜町、
教西寺法話会。
市電、御器所通り下車。
市バス、北山下車

定価　半年　四〇〇円（送共）
一年　八〇〇円（送共）
名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　吉野穂志郎
名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七